



JIC インフォメーション

第 184 号 2015 年 7 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジエーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



旅行・留学のお問い合わせはいつでもお気軽にJICへどうぞ!
<http://www.jic-web.co.jp>

— スズダリのロジェストヴェンスキー大聖堂(世界遺産) —

《特集》 ロシアの世界文化遺産

モスクワ周辺「黄金の環」の文化遺産～セルギエフ・ボサド、ウラジーミル、スズダリ 歴史散歩・・・2P
＜ロシア留学体験記＞ 小山楓 (京都産業大学)・・・8P
＜ジーマの町歩き＞ エストニア、キフヌ島・・・9P

＜本の紹介＞

「戦火のシンフォニー」・・・10P
「毛の力～ロシア・ファーロードをゆく」・・・13P
ロシア生活不思議体験「電話」・・・白井秀治・・・15P
イベント; ロシア文化フェスティバル 2015・・・16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

《特集》ロシアの世界遺産(2)

モスクワ周辺『黄金の環』の文化遺産

セルギエフ・ポサード、ウラジーミル、スズダリ、… 歴史散歩

黄金の環(Золотое кольцо)

黄金の環は、モスクワの北東部近郊に環状に連なる古都。セルギエフ・ポサード、ウラジーミル、スズダリ、ヤロスラブリ、ロストフ、コストロマなどの古都は、ロシアの歴史と精神文化、芸術や建築などの原型が形成された地域として、特に重要視されています。

古代ルーシ発祥の地であるキエフ大公国、ノブゴロド公国の勢力拡大とともに、9 世紀から 11 世紀にかけてこれらの都市が建設され、諸公国の首都として繁栄しました。13 世紀に入ると、モンゴル軍の侵攻により、「タタールの軛」に苦しめられますが、これを撃退したモスクワ大公国による全ルーシ統一によって、これら諸都市は 15 世紀末までに中央集権体制に組み入れられていきました。

今回は、モスクワの北東部に広がる「黄金の環」の世界文化遺産を紹介しましょう。

セルギエフ・ポサードのトロイツェ・セルギ

エフ大修道院の建造物群 (1993 年登録)

セルギエフ・ポサード(Сергиев Посад)は、モスクワ北東約 70km。いわゆる「黄金の環」の都市のなかではモスクワに一番近く、日帰りで訪れることができる宗教都市です。マトリョーシカなど民芸品の産地としてもよく知られています。

トロイツェ・セルギエフ大修道院(至聖三者聖セルギイ大修道院)は、中世ロシアの最も偉大な正教会指導者と言われるラドネジの聖セルギイによって、1340 年代に創建されました。セルギエフ・ポサードは、この大修道院の周辺にできた『門前町』として発展してきたのです。トロイツェ・セルギエフ大修道院は、現在、ロシア正教の最も重要な修道院の一つで、モスクワ神学大学、同神学校が設置されており、ロシア正教の精神的支柱ともいえるべき位置にあります。

トロイツキー大聖堂(至聖三者大聖堂)

ラドネジの聖セルギイの死後、1423 年に完成した石造りの聖堂で、聖セルギイの墓所の上に建てられ、彼の棺が聖堂内

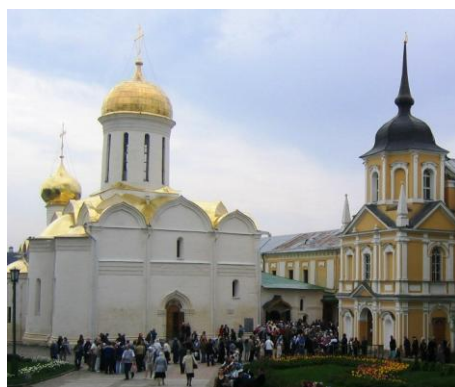


セルギエフ・ポサード全景

に安置されています。大聖堂のイコノスタシス(イコンで覆われた壁面)は、中世ロシアの最高のイコン画家といわれるアンドレイ・リュブリョフらが描いたフレスコ画で装飾されています。中でもリュブリョフのイコン『至聖三者』は有名で、原画は現在、モスクワのトレチャコフ美術館に収蔵されています。

ウスペンスキー大聖堂(生神女就寝大聖堂)

イワン雷帝(イワン四世)の命により 26 年の歳月をかけて建てられた大聖堂(1585 年完成)。金色の大きなドームの周りを



青いタマネギ型のドームが取り囲む大聖堂は、モスクワのクレムリン内のウスペンスキー大聖堂を模して建てられたと言われ、ほぼ同じ形と大きさをしています。内部には 16 世紀から 17 世紀にかけて描かれた巨大なイコノスタシスが並び、荘厳な雰囲気をかもし出しています。

* * *

このほか大修道院内には、聖霊降誕教会(1477 年)、スモレンスカヤ教会(1748 年)、鐘楼、ツァーリ宮殿などの建造物があり、16 世紀に築かれた城壁に囲まれて、一大パノラマを作っています。また、修道院前の広場にはかつて馬屋として使われていた建物があり、現在は歴史博物館になっています。

大修道院は、18 世紀～19 世紀を通じてロシア正教会の一大宗教センターでしたが、1917 年のロシア革命後、ソビエト政権によって閉鎖されました(1920 年)。ソビエト時代に重要な文化財が失われ破壊されましたが、1960 年代以降文化遺産の修復が始まり、ソ連崩壊後の 1993 年にユネスコの世界文化遺産に登録され、再びロシア正教会の聖地として復活しています。

ウラジーミルとスズダリの白亜の建造物群

(1992 年登録)

「ウラジーミルとスズダリの白亜の建造物群」は、ウラジーミル・スズダリ大公国の全盛期(12～13 世紀)に造られた聖堂、修道院、城塞など8つの歴史的建造物で構成されています。

ウラジーミル(Владимир)

ウラジーミルは、モスクワの北東約 180km に位置する「黄金の環」を代表する古都の一つです。ウラジーミルの歴史は、1108 年に、キエフ・ルーシのウラジーミル・モノマフ公がこの地に要塞を築いたことに始まります。モスクワの北東部一帯はザリエーシェ地方(Zalesye)と呼ばれ、ボルガ川支流のオカ川流域の低地に深い森が広がっています。この地方はボルガ川、ドニエプル川、ネヴァ川水系と河川でつながっており、東西南北の交易に便利で、かつ土地が肥えているため、ドニエプル川流域から多くの住民が移り住みました。12 世紀には、ロストフやスズダリを中心にウラジーミル・スズダリ大公国が確立し、内紛や遊牧民の侵入でキエフの勢いが弱まると、ウラジーミルがルーシの首都となり、全盛期を迎えます。しかし、1238 年のモンゴルの侵攻によって町は破壊され、250 年続いた「タタールの軛」の下で町はかつての勢い失い、新興のモスクワへとロシアの支配権は移っていき

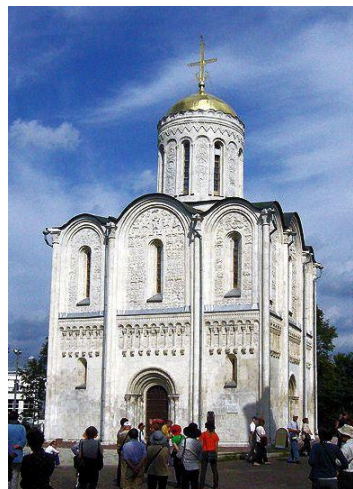
ました。ウラジーミルでは、3 つの建造物が世界遺産に登録されています。



ウスペンスキー大聖堂(生神女就寝大聖堂)

1160 年建立。14 世紀初めまで、ロシアで最高位にあった大聖堂です。建材は、この地に特徴的な白い石灰岩を使い、丘の上に5つの金色の丸屋根を輝かせている姿はとても優美で

す。ロシアでは伝統的に木造建築が造られてきたのですが、ウラジーミル・スズダリ大公国の時代に白亜の聖堂や修道院など、石造建築が造られるようになりました。教会内部の壁面は美しいフレスコ画で覆われていて、教会中央部の天井アーチには、天才画家アンドレイ・リュブリョフが「最後の審判」を描いています。

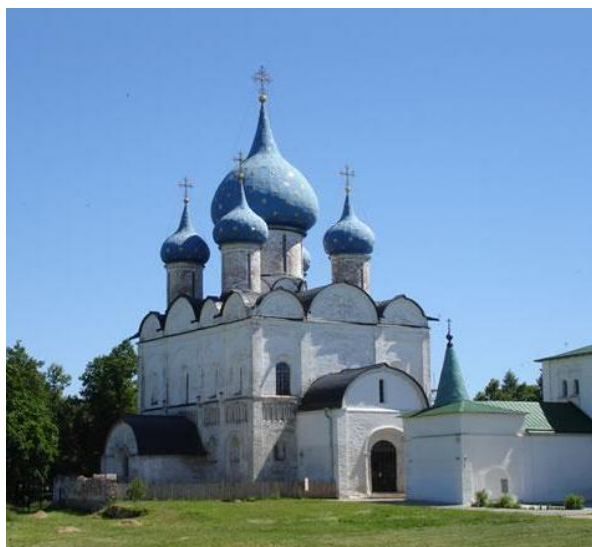


黄金の門

1158 年から 1164 年に築かれた城門。かつてウラジーミルの町を取り囲んでいた城壁には 5 つの外門と 2 つの内門がありましたが、現在はこの黄金の門だけが残っています。メインストリートを見下ろす門の上部には教会が造られていますが、現在は戦争歴史博物館となっています。

ドミトリエフスキー聖堂

1197 年の建立。加工しやすい白石(石灰岩)を建材に使い、外壁一面に見事な浮き彫りが施されているのが特徴です。聖書や歴史を題材に、聖人や歴史上の英雄、動植物などが浮き彫りで豊かに表現されています。



スズダリのロジェストヴェンスキー大聖堂

スズダリ(Суздаль)

ウラジーミルから北に約 30km。人口 1 万人余りの小さな町ですが、町そのものが歴史博物館といえるほど、たくさんの教会や修道院が立ち並んでいます。

スズダリがロシアの年代記に最初に登場するのは 1024 年で、ウラジーミルより 100 年ほどさかのぼります。12 世紀前半、キエフ大公ユーリー・ドルゴルキーの時代にロストフ・スズダリ公国(ウラジーミル・スズダリ大公国の前身)の首都となり、ウ

ラジーミル、ロストフとともにこの地方の中心都市となりました。15 世紀にモスクワ大公国の支配下に入ってから、ロシア正教会の一大中心地となり、17 世紀から 18 世紀にかけて多くの教会が建設されました。当時の街並みは現在までほとんど変化していません。町の周辺には、小川や草原、小さな村があり、こうした田園風景とスズダリの教会建築は、いかにもロシア的で絵画的な風景を生み出しています。スズダリでは、2つの建造物が世界遺産に登録されています。

クレムリンとロジェストヴェンスキー大聖堂

スズダリのクレムリンは、11 世紀に町の成立とともに建設されました。カメンカ川の湾曲を利用した土塁が今も 1.5km ほど残っており、往時をしのばせます。クレムリンの中心部には、1225 年に建立されたロジェストヴェンスキー大聖堂(生神女誕



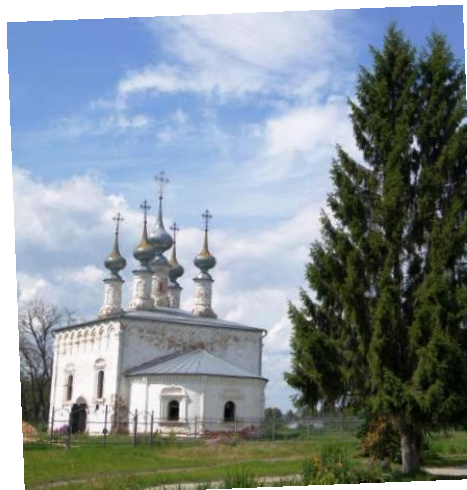
スズダリの田園風景

生大聖堂)が立っています。大聖堂はスズダリに現存するもっとも古い建築物ですが、白石に浮き彫りが施された教会下部だけが 13 世紀当時のもので、上部は 16 世紀に建て替えられました。聖堂内部は、13 世紀から 17 世紀にかけて描かれたフレスコ画やイコノスタシスに覆われています。聖書物語が金メッキで描かれたこの教会の 13 世紀の扉「黄金の門」は有名で、現在は聖堂内に展示されています。

クレムリン内には、大聖堂のほかに、鐘楼、府主教宮殿、木造のニコリスカヤ教会(後年、移築されたもの)などが、博物館として保存されています。また、クレムリンの南側、カメンカ川の対岸には木造建築博物館があり、近隣の村から移築された木造の教会や風車などが保存されています。

スパソ・エフフィミエフ修道院

町の北側の守りとして、カメンカ川の左岸に城壁をめぐらしたスパソ・エフフィミエフ修道院が創建されたのは 1352 年。現在の城壁は、17 世紀にリトアニア・ポーランド軍に破壊された後に建設されたもので、12 の塔を持ち、高さ 8m、長さ 1.5km の威容を誇っています。城壁内には、16 世紀に建てられたスパソ・プレオブラジェンスキー聖堂をはじめ、ブラゴヴェシチェンスカヤ教会、ウスペンスカヤ教会、ニコリスカヤ教会、鐘楼などがあり、博物館、宝物館として使われています。修道院の懲罰室といった珍しい展示もあります。



セーンスカヤ教会、ウスペンスキー教会、イリインスカヤ教会、スモレンスカヤ教会といった 50 近い教会、修道院がひしめいています。

* * *

世界遺産「ウラジーミルとスズダリの白亜の建造物群」には、さらに近隣の町の 3 つの建造物が登録されています。

ボゴリユボヴォ(ウラジーミルとスズダリの間にある町)

アンドレイ・ボゴリユブスキーの居城／1158-1165 年建設、後年に補修

ポクロヴァ・ナ・ネルリ聖堂(ネルリの生神女庇護聖堂)／1165 年創建

キデクシャ(スズダリの北の小さな町)

聖ボリスとグレブ聖堂／1152 年創建、後年改修

ヤロスラヴリの歴史地区 (2005 年登録)

ヤロスラブリ(Ярославль)はモスクワ北方約 250km、ボルガ川とその支流コタラスリ川の合流点にある河港都市です。町の歴史は、11 世紀初頭にキエフ大公国のヤロスラフ賢公がこの地に要塞を築いたときに始まります。町は 1238 年モンゴル軍のルーシ侵攻によって破壊され、その後、15 世紀後半からモスクワ大公国の支配下に入りました。ボルガ川の交通の要衝にあり、16-17 世紀には白海に面した当時のロシア唯一の海港アルハンゲリスクと首都モスクワを結ぶ交易路の町として大いに繁栄しました。現在も、道路網、鉄道網を通じて各地と結ばれ、人口 61 万人を擁する「黄金の環」最大の工業都市となっています。

スパソ・プレオブラジェンスキー修道院

町の中心部は、16 世紀から 18 世紀にかけて建てられた歴史建築物の保存地区になっています。ヤロスラブリで最も古い建物はスパソ・プレオブラジェンスキー修道院にあるスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂ですが、現在の大聖堂は 1224 年に建設された最初の聖堂の基礎の上に 1516 年に再建されたものです。修道院の周りには石の城壁がめぐられ、修道院



イコノスタシス

はこの地を守る要塞として機能していました。17 世紀初頭のスムータと呼ばれる動乱時代には、ロシア・ポーランド戦争でポーランド軍に占領されたモスクワに代わって、ヤロスラブリはロシアの事実上の首都となっていました。大商人クジマ・ミーニンとドミトリー・ポジャルスキー公に率いられたロシアの民衆軍は、この修道院から出撃してモスクワ解放戦にむかったのです(1611 年 11 月 4 日、クレムリンに籠っていた最後のポーランド軍が降伏し、モスクワは解放されました。これにちなんで 11 月 4 日は、今日「国民団結の日」としてロシアの祝日となっています)。

また、古代ロシア文学の重要作品『イーゴリ軍記』は、この修道院付属の図書館で 795 年に発見されました。

イリヤ・プロローク聖堂(預言者イリヤ聖堂)

1650 年に町の毛皮商人スクリーピンの寄付で建てられた聖堂は、壮麗な内部装飾で有名です。聖堂内部はコストロマの職人ニキーチンらによって描かれた鮮やかなフレスコ画で覆われています。フレスコ画は保存状態がよく、宗教的なテーマにとどまらず、農作業風景など当時の人々の生活の様子が詳細に描かれているため、「17 世紀民衆生活の百科事典」と呼ばれています。

イリヤ・プロローク聖堂に代表的ですが、赤レンガで建てら



夏の聖堂

れ白い明るい色のタイルを外観に貼った聖堂は、「ヤロスラブリ式」と呼ばれます。

ヤロスラブリの教会建築の特徴は、「夏用」の聖堂と「冬用」の聖堂とが一对になっていることです。小型の聖堂が冬用で、暖房が施されています。大型の聖堂には暖房がなく、夏場の利用に限られます。

富裕な商人が多かったヤロスラブリでは、17 世紀を通じて 44 の石造聖堂が建てられており、市内各所で当時の繁栄ぶりを窺い知ることができます。

『黄金の環』を構成する古都たち

～歴史散歩



世界遺産には登録されていませんが、「黄金の環」を構成する他の古都も紹介しておきましょう。それぞれの町の歴史はロシア史の重要な場面と重なっており、歴史散歩の格好の教材となっています。

ペレスラブリ・ザレスキー(Переславль-Залесский)

モスクワ・ヤロスラブリ間をつなぐ鉄道または高速道路で北東に走ると、セルギエフ・ポサードを超えて約 70km、ちょうどモスクワとヤロスラブリの中間点に、ペレスラブリ・ザレスキーがあります。1152 年に、キエフ大公ユーリー・ドルゴルキーが北東ルーシの拠点とすべく、この地に要塞を築いたのが町の始まりです。1175 年から 1302 年までペレヤスラブリ公国の首都。1302 年にモスクワ大公国に併合されました。13 世紀半ばに始まるモンゴル軍のルーシ侵入で度々破壊され、また 17 世紀初頭の動乱時代にもポーランド軍の略奪を受け、町はその度に再建されました。18 世紀に始まった紡績業の勃興によって町は発展しましたが、その後、モスクワ・ヤロスラブリ間の鉄

道が、この町から少し離れて敷設されたため、ソ連時代もあまり工業化されず、18 世紀から 19 世紀に形成された街並みが今でも良好に残されています。町の中心地域のクレムリン跡には、この町最古の聖堂である**プレオブラジェンスキー大聖堂**(1157 年)が立つほか、16 世紀から 19 世紀にかけて築かれた聖堂や修道院が数多く残っています。

ロストフ・ヴェリーキー(Ростов)

ペレスラブリ・ザレスキーからさらに北東のヤロスラブリ方向へ 80km、ロシア最古級の町、ロストフ・ヴェリーキーがネロ湖の畔にたたずんでいます。ロシアの年代記には 862 年にこの町の名前が初めて出きます。12 世紀に栄えたロストフ公国は、やがて「ロストフ・スズダリ公国」、「ウラジーミル・スズダリ大公国」となり、政治の中心は新興のスズダリやウラジーミルへと移っていきしましたが、宗教的重要性を保ち続けました。

1670 年に建設が始められた**クレムリン**は、モスクワのクレムリンに比肩する美しさで、ロストフの町のランドマークとなっています。城壁内には、**ウスペンスキー聖堂**、**鐘楼**、**スパサ・ナ・セニャフ聖堂**、**バスクレセーニエフ聖堂**などが立ち並び、どこから見ても絵になる風景を作り出しています。

ルイビンスク(Рыбинск)

ヤロスラブリから北西に約 80km ボルガ川を遡ると、シェクスナ川との合流地点にルイビンスクがあります。モスクワの北北東約 250km に位置する河港都市です。

ルイビンスクは、ボルガ川沿いで最も古くから人が住んでいた地点の一つで、15-16 世紀にはルイブナヤ・スロボダ(漁師村)と呼ばれていました。17 世紀以降、水運・通商によって発展し、ボルガ川上流の穀物集積地、交易の町として栄えます。その頃に多くの聖堂が作られました。ソ連時代の 1941 年にシェクスナ川を堰き止めるダムと発電所が建設され、今ではボルガ川の一部となっている巨大なルイビンスク湖が、町の北側に広がっています。ソ連時代にこの町の名前は、シチェルバコフ(1946 年)→ルイビンスク(1957 年)→アンドロポフ(1984 年)→ルイビンスク(1989 年)と 4 度も変わりました。

ウグリチ(У́глич)

ルイビンスクから南西へボルガ川をさらに遡ったところにウグリチはあります。夏の観光シーズンにはボルガ川クルーズの大型客船が停泊し、多くの観光客が訪れる町です。

町の創建は、ロストフやヤロスラブリ同様に古く、モスクワ大公国の北の境界にあたるウグリチは度々外敵に襲われ、町を焼かれています。諸公国を併合し、タタールを打ち破ったモスクワ大公・イワン三世は、1462 年にウグリチを弟のアンドレイに与えました。アンドレイ公の治下でウグリチは発展し、石造の聖堂や建物が作られるようになったのです。

何よりこの町が有名なのは、イワン雷帝(イワン四世)の末

子・ドミトリー皇子の暗殺事件によってです。イワン雷帝の死後、幼いドミトリー皇子はウグリチに追いやられていましたが、

1591 年 5 月宮廷の中庭で死んでいるのが見つかりました(当時 8 歳)。イワン四世の後を継いだ大公・フョードルー世には子がなく、彼の死(1598 年)によって 800 年続いたリュールク朝は断絶しました。



血の上の聖デミトリオス聖堂

皇位を狙ったボリス・ゴドノフ(フョードルー世の義兄にして摂政)が暗殺したという噂が広がり、「いや、ドミトリーは生きている」という民衆の信仰に乗じて偽ドミトリーが次々と現れ、そこにポーランド・リトアニア共和国やスエーデン王国が介入し、空位になった皇帝の座をめぐる、ロシアは大動乱の時代＝スムータ(1598 年～1613 年)に突入しました。

動乱時代を収束する過程でロマノフ朝が成立するのですが、皇位についたミハイル・ロマノフは、非業の死を遂げたドミトリー皇子を列聖し、ウグリチを巡礼の地と決めました。ドミトリーが死んだ場所には**血の上の聖デミトリオス聖堂**が建てられました(1690 年)。

市の中心部には 10 世紀に築かれた**クレムリン**があり、中には**スパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂**と**血の上の聖デミトリオス聖堂**が美しい姿を見せています。そのほか、アレクセイエフスキー修道院、ヴォスクレセンスキー修道院、洗礼者ヨハネ聖堂、スモレンスカヤ聖堂、コルンスカヤ聖堂、カザンスカヤ聖堂など、17 世紀から 18 世紀にかけて造られた建造物を市内各所で見るすることができます。



ボルガ川のクルーズ船

コストロマ(Кострома)

ヤロスラブリの東 70km、モスクワの北東 380km。ボルガ川とコストロマ川の合流点に建設されたこの町は、ロシア皇帝(ツァーリ)・ロマノフ家と深い因縁で結ばれた町です。

コストロマは、1152 年、ユーリー・ドルゴルーキーによって創建されました。コストロマ公国、スズダリ・ウラジーミル大公国を



へてモスクワ大公国の支配下にはいったコストロマは、モスクワ公国最北の町のひとつとして、モスクワを侵す敵からの非難所として使われました。16 世紀には白海に面した海港アルハンゲリリスク通じて、モスクワとイギリス、オランダとの貿易が始まり、河港都市コストロマはヤロスラブリ同様、交易拠点として大いに繁栄しました。

大動乱の時代、コストロマは 2 度にわたってポーランド軍に占領されましたが、民衆の抵抗によりこれを撃退しています。コストロマの農民、イワン・スサーニンは英雄的に戦い、外敵の侵略に対する抵抗のシンボルとなりました。スサーニンの名前は、この町の中心広場の名前となり、今も人々に親しまれています。のちにロマノフ朝初代のツァーリとなるミハイル・ロマノフは少年時代、コストロマのイパティエフ修道院に隠棲していました。彼は、1612 年にモスクワから来た使者からツァーリに推戴することを告げられ、翌年の全国会議(貴族、聖職者、大商人らで構成する身分制議会)でツァーリに選出されて、イパティエフ修道院内のトロイツキー聖堂で即位します。これによってロマノフ朝の歴代のツァーリは、コストロマに特別な保護を与え、イパティエフ修道院を欠かさず訪れました。

1773 年の大火で町は大被害を受けましたが、その後、ボルガ川の船着き場に隣接したスサーニン広場から放射状に街路が整備され、今日に残るコストロマの街並みが作られました。

スサーニン広場には、高い火の見塔を持つ 19 世紀の消防



署、向かいあう2つの商業アーケードがあり、かつての繁栄ぶりを伝えています。白壁の商業アーケードは、一方がマーケット、もう一方が服飾店や古美術店が入る商店街として、現在も使われています。

14 世紀に創設されたイパティエフ修道院の中心に建つのは巨大なトロイツキー大聖堂(1652 年再建)。内部には建設当時の鮮明なフレスコ画が残り、80 ものイコンで構成されるイコノスタシスが美しさを放っています。院内に建てられたロマノフ宮殿には、ロマノフ家の資料が展示されています。

そのほか、市内にはヴァスクレセーニエ聖堂(1651 年創建)、バガヤベリンスキー修道院など、多くの歴史建造物が保存されています。

イワノボ(Иваново)

モスクワ北東 300km。「ロシアの織物の首都」。

亜麻織物を作る村だったイワノボは、17 世紀頃から商業都市となり、1710 年にピョートル大帝によって織物工場が作られました。19 世紀にはロシア繊維産業の中心都市となり、20 世紀にいたるまで「ロシアのマンチェスター」と呼ばれる繁栄を享受しました。しかし、労働者の生活条件は劣悪で、労働争議、ストライキが頻発し、1905 年の第一次ロシア革命につながる労働運動が起こったことでも知られています。1905 年 5 月にストライキを指導する労働者代表ソビエト(労働者による評議会)がイワノボで結成されましたが、これは首都サンクトペテルブルグのソビエトと並ぶロシア最初のソビエトの一つと言われています。

イワノボの主産業は、現在も繊維工業ですが、化学工業や機械工業も立地しています。市内には、19 世紀末の繊維産業最盛期に建てられたアール・ヌーボー建築や 20 世紀初頭のロシア構成主義の建築物が多く残り、往時をしのばせます。

アレクサンドロフ(Александров)

セルギエフ・ポサードの北東約 20km。モスクワ大公国のワシリー三世(イワン雷帝の父)が、この町を創建しました。

16 世紀前半から 17 世紀にかけて建設された城壁に囲まれた多数の聖堂や宮殿の集合体＝アレクサンドロフスカヤ・スロボダ(アレクサンドロフ離宮)が有名です。市街地にも古い聖堂や美術館があります。

イワン雷帝は、貴族会議の力を弱めるため、1564 年 12 月に突然、退位宣言をしてこの町に引き籠りました。そしてツァーリの復帰を求める民衆の圧力を利用して、貴族会議から非常大権を獲得します。以後、ツァーリ独裁権のあくなき拡大を目指すイワン雷帝後半生の残虐政治が続くことになります。

アレクサンドロフスカヤ・スロボダの中には博物館があり、イワン雷帝の生涯の紹介や収蔵品の展示を行っています。

【ロシア留学体験記】

期待していたこと、驚いたこと、
ギャップを越えて、留学は続く

京都産業大学・小山楓(モスクワ大学留学中)

日本を出国しロシア・モスクワに留学してから 2 ヶ月が経ちました。モスクワに着いた当初はロシアと日本の寒暖差に驚き、曇りばかりが続くどんよりとした空を眺めては鬱々とした気持ちになりましたが、季節は夏を迎え青空が広がる空を眺めては刺激に満ちたモスクワライフに日々、心を躍らせています。

またロシア料理も自分の口に合い、大学の食堂のごはんが美味しいので、今では授業終了のブザーが鳴るとパブロフの犬のように唾液が出てしまう体になってしまいました。

◆留学前に期待していたこと

留学前に最も期待していたことは「異文化・多様な価値観との交流」でした。ロシアは 100 以上の民族が住んでいる世界有数の多民族国家です。様々な価値観が混在する環境に身を置くことにより、異文化交流を盛んにできると考えていました。

海外居住経験もなく、単一民族・単一国家(原文ママ*注)である日本に住み続けた私にとって、日本人であることは「普通」でした。しかし「普通」であるがゆえに日本とは何か、日本人とは何なのかを深く思考する機会はありませんでした。私がこの留学を通じて目指していたのは、どのような価値観の人たちであれ、その人たちと気持ちを分かち合い、またその人たちから求め頼られる人間になることです。

そのために日本人としてのアイデンティティを確立し、自分の人間性の豊饒化に努めること。そのような適切な環境が用意されていると留学前は期待していました。

◆実際にモスクワに着いてから感じたギャップ

ロシア・モスクワでの生活は 3 ヶ月目に突入しましたが、私が期待していた「異文化・多様な価値観との交流」は決して用意されているものではありませんでした。

そもそもロシアに住む多民族と交流するためにはロシアの公用語であるロシア語をある一定以上話せなくては異文化交流どころではありません。英語が通じると思ったら大間違いです。私は今もそのある一定以上のロシア語力が身に付いておらず、多民族との交流は果たせていません。当たり前のことですが日本語は日本でしか通用しない言語だと改めて理解させられました。

また日本語を学ぶロシア人たちと交流する機会は多くあり

ますが、ほとんどは高等教育を受けたスラブ民族の方ばかり。それでは結局ロシアの一側面しか垣間見ることができず、本当の意味でロシアを理解したとは言えないでしょう。

◆驚いた体験

ロシアに来て驚いたことは数えきれないほどありますが、その中で最も驚いたのが 5 月 9 日に行われた戦勝記念日です。第 2 次世界大戦におけるソビエト社会主義共和国連邦の勝利を祝うものですが、そもそも戦勝記念日という日があること自体が、日本人である私にとって大きなカルチャーショックでした。それは日本が第 2 次世界大戦において敗戦国であるからです。8 月 15 日に終戦記念日がありますが、日本人にとってその日は、戦争で亡くなった方々の死を悼み、二度とそのような悲劇を繰り返さないと誓う日です(もともとほとんど形骸化していますが)。日本で暮らしてきた私にとって、70 年も前の戦争の勝利に沸き立ち、打ち震えられるロシア人の姿に衝撃を受けました。またその日に自らの軍事力を世界に誇示するロシア連邦という国そのものにも驚きました。私たちにとって戦争とは二度と繰り返してはいけない悲劇であり、そのために憲法第 9 条は公布され、今日まで守られ続けたのです。

しかしロシアの軍事パレードはそんな戦争を明日にでも行えると言わんばかりのものでした。そんな軍事パレードを見て歓声を挙げるロシア国民は、私にとってそれは大きなカルチャーショックでした。

◆嬉しかった体験、悲しかった体験

ロシアに来てから最も嬉しかった経験は、自らが日本で生まれ育った日本人であり、それだけで好意的な印象を持ってくれるロシア人がいるという事実です。日本人である私の周りには、良くも悪くも日本に好意的な印象を持つロシア人が集まってきます。日本のアニメが好きだから、日本の漢字が美しいから、…、理由は人それぞれですが、日本人がロシアにおいて認められ好かれているという事実は、日本に居ては決して体験できず、わからないことでした。

反対に悲しかった経験は、ロシア人の東日本大震災に対する認識でした。

私の出身地は宮城県気仙沼市という海と山に囲まれた美しい街で、4 年前の東日本大震災で最も被害が大きかった

街の 1 つでした。4 年前、当時高校生だった私は被災しました。世界的に見ても大きい自然災害だと思っていましたが、ロシアでは東日本大震災をどう見ているのか。自分にとってロシア人に最も聞いてみたいことでした。

そして聞いてみたところ返ってきた答えは、「ああ、フクシマね。」の一言でした。

自分の出身地を言っても「わからない」と返され、ひどく落ち込みました。しかし後から考えてみると、大きな地震もなく海にも面していないロシアにとって、日本の地震や津波は対岸の火事であり、反対に福島第 1 原子力発電所の事故は、29 年前チェルノブイリ原子力発電所の事故があったロシアにとってより大きな関心があり、自分事のように捉えられる出来事であって、だから東日本大震災=フクシマと連想が繋がっているのではないかと思います。実際、福島の



街角での戦勝記念日パレード

原子力発電所の事故に関してはかなり調べて、動向を確認しているロシア人がほとんどでした。人間は自分に関係がある・痛みを知っていることには自分事のように関心を持ちますが、それ以外は所詮他人事だと割り切ってしまう。悲しいことですが、自分にとって主観的にとても大事に捉えてしまう東日本大震災について、外部から見た客観的な意見・視点を見ることができたのは大きな学びになりました。

◆新しい環境での新たな目標

私にとってロシアという新鮮で刺激的な環境においての目標は出国前と変わらず、「どのような価値観の人たちであれ、その人たちと気持ちを分かち合い、またその人たちから求め頼られる人間」になることです。その目標を達成するための留学中の達成目標として、

- ① ロシア人との会話に不自由がない程度の語学力を身につける
- ② 旅行会社にてインターンシップを行い、実際の実務経験を通してロシア人の嗜好を分析し、ロシア人が魅力に感じるような訪日ツアーの企画・立案
- ③ 日本料理教室を始めとした日本文化をロシアに広める活動

以上 3 点を達成し、充実した留学生活になるよう努めたいと思います。

*編集部注;多くの人と同じように、小山君もまた「単一民族、単一国家」という幻想にとらわれているようですが、厳密に言うと日本は単一民族でも単一国家でもありません。江戸時代から明治期にかけて日本人が征服し、日本国に組み入れたアイヌ民族、琉球民族がいるし、過去の植民地支配の結果として台湾や朝鮮半島、中国大陆から日本に自発的あるいは半強制的に移り住んだ在日韓国・朝鮮人、中国人も数多く住んでいます。日本社会の複雑な現象を理解するためには、これらの事実を正に確認しておく必要があると思います。

《ジーマの町を歩けば》 エストニア・バルト海・キフヌ島

ドミトリー・トカチェンコ(タリン在住)

エストニアの民族生活について調べていて、キフヌ島のことを見つけました。

キフヌ(Kihnu)とは、バルト海のリガ湾の北東部に位置する面積 16 平方キロの小さな島です。

夏にしか行けないところです。

タリンからバスか電車でパルヌ市まで行き、パルヌから船で 2 時間ぐらいでキフヌに行けます。冬になると海が凍ってしまうため、飛行機でしか行けなくなります。

キフヌは昔からエストニアの領土でしたが、本土から 12 キロぐらい離れている島なので、いつもある程度孤立した生活をしてきました。キフヌの男性はみんな海に出て、漁猟をしていました。女性は家事を全部していました。そのため、バイクやトラクターの運転もいまだに主に女性がやっています。



色彩鮮やかなキフヌの民族衣装(スカート)

また、キフヌはとても小さい島なので、自分の家を出ると即ち「交際場に出る」ことになり、多くの女性はいちばん美し

い服を着ます。それはキフヌの伝統的な民族衣装です。キフヌ島には店は 3 軒しかないのですが、その店の近くではいつも、伝統的な服を着て歩いている女性を見かけることができます。

民族衣装は、主に赤、そして青、黒などの模様の柄の美しいスカートです。もっとよく知りたくなってキフヌ博物館に行きました。博物館のスタッフも、美しいスカートの女性で、微笑みながら出迎えてくれました。

「スカートいくらくらいしますか」

「400 ユーロとか、…」

「ええ？ そんなにするの？ キフヌの給料はそんなに高いの？」

「この値段は観光客用ですよ。私たちは買ったりなんかしないです。キフヌの女性はみな自分の手で作りますから」

という対話をしました。

もっと詳しく聞いてみると、赤は喜び、黒は悲しみを意味していて、たとえば旦那さんが亡くなると黒のリボンが多いスカートを着て、だんだん赤のリボンの数を多くして、その哀



キフヌ島の民家

傷を少しづつ乗り越えるという意味も入っているそうです。博物館では、スカートを縫うマスタークラスも開かれています。

キフヌ島の伝統結婚式は、ユネスコの世界無形文化遺産に入っており、世界的に知られています。ただし、最後の伝統的な結婚式は 1995 年に行われました。これからまた行われるかどうかは未定です。

キフヌの文化をもっと知りたい方には、キフヌの多くの女性が参加する「キフヌムア」(Kihnumua)というフォークアンサンブルがお勧めです。2010 年に日本公演を行ったこともある、エストニアの有名なアンサンブルの一つです。

最後に、キフヌにはホテルがないので、タリンかパルヌから日帰り旅行をするか、民家に泊まるかしかな方法がありません。夏には、キフヌの多くの人がお客さんを自分の家に泊めてくれるし、朝食おいしい家庭料理を出してくれます。ぜひキフヌにいらしてみてください！

本の紹介

戦火のシンフォニー

～レニングラード封鎖 345 日目の真実

著者;ひの まどか

発行;新潮社

定価;1800 円＋税



久しぶりに感動する本を読んだ。

今年は第二次世界大戦が終結して 70 周年にあたる。第二次大戦中、ロシア第二の都市レニングラード(現、サンクト・ペテルブルグ)は、

1941 年 8 月 30 日から 44 年 1 月 27 日まで、約 2 年 5 カ月間にわたってドイツ軍に包囲、封鎖された。封鎖 1 年目の冬はとりわけ厳冬で、砲爆撃下、食料もエネルギーも欠乏する中で、おびたしい人々が爆死、凍死、餓死に追い込まれた。ドイツ軍の封鎖による死亡者の数は正確にわかっていないが、少なくとも 100 万人以上の犠牲者が出たと言われている。

この封鎖の町で、この町が生んだ天才音楽家、ドミトリー・ショスタコーヴィチが、この町の人々のために作曲した交響曲第七番(通称;レニングラード交響曲)が、レニングラード・ラジオ・シンフォニーによって初演されたのは、包囲 345 日目の 1942 年 8 月 9 日のことだった。

本書は、封鎖の町レニングラードで、戦火と極度の飢え、極寒に耐えつつ、音楽家たちがいかに人間としての精神を維持し、戦争に立ち向かい、人々に生きる力と喜びを与えたかを、現地取材と生存者へのインタビュー、数多の戦争資料をもとに、生き生きと描いたドキュメンタリーである。

1941 年 6 月 22 日未明、ヒトラーのドイツ軍は突然国境を侵し、ソ連領内へ一斉に進撃を開始した。不意を突かれたソ連軍は後退に後退を重ね、開戦 2 カ月でレニングラードは完全に包囲された。ドイツ軍はミンスク(ベラルーシ)、キエフ(ウクライナ)を制圧し、10 月にはクレムリンまであと十数キロに迫り、首都モスクワを陥落寸前の危機に陥れた。

この時、スターリンは、モスクワの首都機能と最高司令部を二つに分け、第 2 グループをクイビシェフ(現、サマーラ)に疎開させ、ドイツ軍の占領を覚悟してモスクワを焦土と化すために、市内の主な建造物に爆薬を仕掛けるところまで追い詰められた。しかし、スターリン自身はモスクワに踏みと

どまり、前線兵士に「一步も後退するな！」と、「全員その場で死ね」というに等しい非情な命令を発してこの危機を持ちこたえた。

モスクワ攻略を阻止し、冬将軍の到来とともに持久戦にはいった独ソ戦は、1942 年秋から冬にかけてのスターリングラード(現、ボルゴグラード)攻防戦での勝利を決定的な契機としてソ連軍が反攻に転じ、ウクライナの奪還から東ヨーロッパの解放、そして 1945 年 5 月のベルリン占領、ナチス・ドイツの無条件降伏へと突き進んでいく。

しかし、この間、ソ連第二の都市レニングラードは 900 日にわたりドイツ軍の封鎖に苦しめられ続けたのである。

戦時下の市民生活はどのようなものであったか。

開戦と同時に、国内の工場群は軍需生産への切り替えと 24 時間操業を命じられた。労働者には 1 日 14 時間～18 時間の労働が課せられ、戦闘機、戦車、装甲車、機銃、手榴弾、地雷等の武器製造が急ピッチで進められた。工場や企業で働く人間を除く全市民が(その大半は女性や老人だったが)、塹壕掘りと防空壕造りに動員された。体力のない女性たちはカムフラージュ・ネット作りを命じられた。軍や政府の重要施設、歴史文化施設(教会や宮殿)には、ドイツ軍の標的にならないように、巨大な迷彩色のネットが被せられた。

芸術文化都市レニングラードが誇る重要な芸術団体、教育研究機関にはウラル、シベリア地方への疎開命令が出された。レニングラード交響楽団(ノボシビルスク)、キーロフ・オペラバレエ劇場(ペルミ)、レニングラード大学(サラトフ)、レニングラード音楽院(タシケント)、レンフィルム(アルマアタ)といった団体が疎開していったが、命令に従わずレニングラードに踏みとどまった芸術家、研究者も多かった。

ラジオ・シンフォニーは政府の疎開リストには入っていなかった。疎開命令から外された大半の音楽家、芸術家たちには、一般市民と同じ塹壕掘りや施設の防火訓練、軍事訓練への参加が課せられた。志願して、あるいは徴兵されて、全線に派遣された若い音楽家、芸術家も多かった。

ラジオ放送には厳重な報道管制が敷かれ、政府発表のニュースとプロパガンダ(宣伝工作)が放送の中心を占めた。音楽は完全に片隅に追いやられた。市共産党の幹部は、ラジオ委員会の全職員を集めた集会で宣言した。「非常時に音楽は不要だ。こんな時、芸術は何の役にも立たない。『大砲が鳴る時、ミューズは黙る』だ(*注 1)。」

戦争という過酷な現実直面した音楽家や画家、俳優、学者たちは、一人ひとりがこの現実はどう立ち向かうのか、試されていた。

*注 1; ミューズ=Muse; ギリシア神話で文芸(音楽、詩作、言語活動など)をつかさどる女神たち。Music(音楽)、Museum(美術館)といった語は、このミューズから派生している。

国の宝とも言うべき音楽家、ショスターコービッチにも政府の疎開命令が出されたが、彼は当初これを拒否して、レニングラードに踏みとどまった。音楽院の消火隊の一員として働き、同時に兵士や市民を勇気づける軍歌の作曲や編曲を行っていた彼もまた、戦時に音楽は何の役に立つのか、模索していた。そしてついに、単なる愛国歌や軍歌ではなく、彼が愛するレニングラードの市民と祖国防衛に立ちあがった全国民に捧げる壮大な交響曲(レニングラード交響曲)の作曲に着手した。交響曲第七番は、ショスターコービッチがレニングラードに留まっていた 42 年 9 月末までに第 3 楽章まで書きあげられ、スターリンの命令によって半ば強制的にモスクワ、クイビシエフへと疎開させられた後、その年の 12 月末に第 4 楽章が完成した。

この間、8 月 30 日にレニングラードとソ連中央部を結ぶ鉄道駅がドイツ軍に占領され、これによって鉄道を使った疎開も市への食糧輸送もできなくなった。レニングラード封鎖が始まった。しかし、鉄道はダメでも、市北東部のラドガ湖の西岸まで船で物資を運び、トラック、列車で市内に輸送するルートは辛うじて残されていた。

9 月 2 日、市長は食糧配給量をそれまでの三分の二に引き下げた。主食のパンは 1 日に労働者 600g、事務職員 400g、扶養家族と子供 300g に減らされた。しかし、それでも企業や工場の食堂は開いており、配給切符なしで食べられたので、市民の食生活にはまだしばらく余裕があった。

9 月 4 日、ドイツ軍は包囲の外側から市内への砲撃を開始した。

9 月 6 日、ドイツ軍による最初の空襲が行われ、やがて 9 月 8 日から連日の大空襲が始まった。

にもかかわらず、市内ではこの日から「秋のコンサート・シーズン」が開幕したのである。ミュージカル・コメディ劇場がオペレッタ「マリツァ」の上演でシーズンの幕を開け、8 日にはプーシキン協会のアーティストによるコンサートが 500 名の観客を集めて開かれた。市役所は、アーティストたちの要塞建設の労働を免除し、観客には空襲に備えて上着やコートを着たまま観劇してもよいとの通達を出した。レニングラード市内では、空襲や砲撃の中でも、劇団が公演を続け、たくさんの市民が観劇やコンサートに集まり、戦火に荒んだ心を慰めた。

ソ連でペレストロイカが始まった 1980 年代後半に公開された歴史資料によれば、この時期、スターリンはドイツ軍のレニングラード占領に備えて、モスクワ同様、市内の主要な橋、工場、駅、鉄道、その他の重要施設に爆破装置を仕掛ける命令を密かに下していた。9 月 17 日までドイツの大軍が市内突入の体制をとり、レニングラードはまさに『風前の灯』の状態にあったのだ。しかし、ヒトラーは包囲軍をモスク

ワ戦に投入する決定を突然下す。18 日から主力軍が南方に移動したため、町は陥落を免れた。けれども、包囲と封鎖は続く。ドイツ軍は包囲線で停止したが、攻撃の手を緩めたわけではなかった。空襲と砲撃が市民生活を脅かし続けた。

「レニングラードは今日か明日にも陥落する」。ベルリン放送は連日、ヒトラーの演説を流し続けた。

しかし、「町は生き残って戦っている」。ナチスのプロパガンダに対抗して、この事実を雄弁に全世界に知らせる方法はないものか。市共産党委員会は、ラジオ・シンフォニーの活動再開を決定した。

軍隊や工場に動員されて散り散りになっていた楽団員を集めてようやく 52 名のオーケストラが編成された。指揮者はショスタコービッチとともに音楽院で学んだカール・エリアスベルグ。9 月 29 日の深夜、イギリス向けのラジオコンサートでチャイコフスキーの交響曲第 5 番が演奏された。放送はレニングラード市民にも流され、さらに市の防衛線に沿って置かれた無数の大スピーカーを通して、前線にも音楽が届けられた。これは、ソ連兵の愛国心を奮い立たせると同時に、ドイツ兵を驚愕させたに違いない。今にも虫の息と思われたレニングラードから、力強いオーケストラの演奏が流れてきたのだ。

翌朝、多くの市民が『ラジオの家』(ラジオ局)を訪れ、感謝の言葉を職員に伝えた。「今は音楽どころではないと思っていたが、どんな状況にあっても、音楽は幸せな時を呼び返し、心の支えになってくれる」。

こうして、ラジオ・シンフォニーの活動は再開されたのも束の間、厳寒の冬の到来とともに、レニングラードには無慈悲な「死の時」が刻まれることになる。

11 月 8 日、ドイツ軍機はモスクワとラドガ湖補給路をつなぐ鉄道駅を爆撃し、レニングラードへの食糧補給を完全に切断了。市民への配給量は、労働者 1 日 300g、それ以外は一律 150g と、さらに引き下げられた。そして 11 月後半から極寒のマローズが飢えに苦しむ町を襲った。死は日常的になり、寒さと栄養失調が刻々と人々を死に追いやった。それでも町の音楽生活は 12 月末までは細々と続いた。ラジオ・シンフォニーは 12 月 31 日の深夜にイギリス向けの放送演奏を行った後、その活動を停止した。

11 月の死者 12000 人、12 月の死者 53000 人、そして 1 月に入ると死者の数は 1 日に 3000 人～5000 人へと激増した。毎日、手籠で遺体を墓地に運ぶ人が街中を行き交ったが、共同墓地はすでに一杯。埋葬できずに凍った遺体が墓地や病院の周辺、はてはアパートの中庭や通りに積み重ねられた。

忌まわしいことに、飢餓と厳寒は一部の人々から人間らしさをも奪い去った。公文書には記録されていないが、町中

に人肉食がはびこった。墓地や通りに放置された遺体から肉を切り取り、持ちかえて密かに食べる者が横行した。

音楽がなくなったラジオ放送からは、メトロノームのカッ、カッ、カッ、カッ、という無機質な音だけが陰気に鳴り響いていた。

モスクワとラドガ湖補給路をつなぐ鉄道駅はドイツ軍に占領されたが、11 月後半からラドガ湖の氷結とともに、氷上道路が切り開かれ、物資の補給が再開された。市民が「命の道」と呼んだ氷上道路は氷が厚くなるとともに増え、多くの兵士が氷の破碎で水没死する危険を冒して、ドイツ軍の攻撃を避けながら、物資をレニングラードに届け、また町から疎開する人々を対岸に送り届けた。1941 年末の時点で、レニングラードにはまだ約 230 万人が残っていたが、42 年 6 月には市の人口は 110 万人に減っていた。冬の間の死者が 63 万人、ラドガ湖の氷が解けるまでに疎開した人が約 55 万人と推定されている。

こうして町は地獄をくぐり抜け、すこしづつ息を吹き返していった。「スタツィオナール」(栄養失調の患者に最小限度の医療と、配給よりも少しマシな食事を提供する施設)やバーニャ(浴場)が開設され、再建への取り組みが始まった。市北部の郊外に広大なピスカリョフ墓地が造られ、何万体もの遺体が埋葬された(この世界最大の共同墓地には市民 42 万人、兵士 7 万人、計 49 万人が眠っている)。

「君らは何でこんな陰気な雰囲気を作っている！何か音楽をやらんか！」

42 年 3 月 1 日、レニングラードの最高責任者ジダーノフは、ラジオ委員会に直接電話を入れてラジオ・シンフォニーの再開を指示した。しかし、前年末に活動を停止した時点で五十数名いた楽団員のうち、半数はすでに亡くなっていた。

「ラジオ委員会は音楽家を必要としています。ラジオ・シンフォニーのメンバーで、現在工場や製造所で補助員として働いている人、軍楽隊で働いている人、家で療養している人は、『ラジオの家』に出頭してください。その他のレニングラードに居る生き残った音楽家は、全員『ラジオの家』に来て登録してください」。

レニングラード・ラジオ委員会とラジオ・シンフォニーの面々が、辛うじて生き残った音楽家たちを探し出し、体力を回復させ、機関銃や工場機械の操作で損なわれた繊細な指の感覚を生き返らせてオーケストラを再編成し、同時に交響曲第七番のスコアをモスクワから取り寄せ、膨大なパート譜を手書きで作成して、レニングラード初演にこぎつけていく本書の後半部分は、まさに圧巻。それ自体がスリリングなドキュメンタリーとして、読む者の感動を呼び起こす。

言うまでもなく、交響曲第七番のソ連初演はレニングラードではなく、ラジオ・シンフォニーの再建が始まった直後の 3 月 5 日にクイビシエフで行われ、次いで 3 月 29 日モスクワで行われた。レニングラードの町と市民のために書かれた交響曲はいつのまにかスターリンのための交響曲とされ、きわめて過酷な状況下でオーケストラ再編に取り組んだレニングラード・ラジオ・シンフォニーに十分な援助の手が差し延べられなかったことや、戦後も長い間ラジオ・シンフォニーの偉業がソ連の音楽史のなかで正当に扱われてこなかった背景についても、著者は事実を踏まえて過不足なく言及している。

「しかし、ミューズは黙らなかつた」。音楽・芸術の神は、戦火にもまれても決して黙りこまなかつた。エピローグの言葉は、読む者に深い感動と共感を呼び起こす。

人間とは、どんなに残虐で、醜悪かつ非道な行いをも平然と行う動物であるとともに、かくも崇高で、気高く、勇気にあふれた存在でもあるのだということを、本書は戦時下に置かれた音楽家たちの姿を通して、雄弁に物語っている。

(2015 年 6 月 30 日／伏田昌義)

本の紹介

『毛の力』ロシア・ファードをゆく

著者：山口ミルコ
発行：小学館
定価：1300 円＋税

これは、著者・山口ミルコさんの再生の物語である。

20 年の出版社勤務ののち、乳がんを患った著者は、抗がん剤の副作用によって「毛のない生活」を送った。がんと向き合い、「毛のない生活」からの脱出、再生を試みる著者の支えとなったのは、菜食を中心とする自然な生き方とロシアだった。

がん体験者がすすめる自然な生き方

評者は、何人かの親しい先輩・友人をがんで亡くし、自身も肺がんの疑いでしばらく通院した経験から、がん治療にかかわる書物を普通の人よりは少しくさん読んでいると思う。現在の日本の「がん標準療法」は、外科手術＝がん細胞切除、化学療法＝抗がん剤投与、放射線治療＝がん細胞へ

のピンポイント攻撃の、いわゆる三大療法である。標準治療というのは、医療保険がきく、すなわち厚生労働省管轄の医療保険制度の下で、医療機関と製薬会社に利益が落ちるシステムの中でのスタンダードという意味で、実際には三大療法に含まれないたくさんのがん治療方法が試みられている。それは、がん患者や治療にあたる医師たちが、標準療法だけではがんを根治できないと感じているからであり、また外科手術や抗がん剤投与では逆に患者を苦しめ、命を縮めるケースが多いと経験的に知ることになってきたからである。そのような中から、がんもまた生活習慣病の一種であり、過食や飽食、運動不足、ストレス過多の生活を改め、菜食を中心とする自然な生き方が、がんと向き合い、生活の質を良好に保つ上で大切だと考えるがん経験者が増えている。山口さんが抗がん剤治療を途中で止め、菜食生活に入っていたのは、がんと真剣に向き合う人の自然な選択肢の一つなのだろう。しかし、ここではそれだけが本題ではない。もう一つの本題はロシアだ。

世界平和の子

「ミルコ」。可愛い響きではあるが、日本語としてはちょっと変わった名前を聞いて、ロシア語を知っている人なら、すぐにピンとくるだろう。

「ミルコ」＝МИР＝ミール＝世界または平和。

「ミルコ」＝「世界平和の子」。

命名したのはミルコさんのお父さん。大学でロシア語を専攻し、総合商社に入社した父上は、主に北洋材を扱う部署に配属され、30 年以上も対ソ連・ロシア貿易に携わってこられた。ロシアと関わりの深い父を持ったミルコさんではあるが、しかし、彼女自身はロシアと無縁の生活を長らく送ってきた。それが、がんを患い、両親の住む千葉の田舎で暮らすようになってから、自分の生き方のルーツをどこに求めるか、真剣に考えるようになったようだ。

著者は言う。

「実家に戻ったことで私の原点（名前のこともあるし）はロシアにあったと気がついて、父の蔵書に手をつけた。父の書棚にはソ連時代からの政治家の評伝や、ロシア・シベリアの歴史書たちが埃をかぶって身を寄せあい、うずくまっていた。開けてみると、ロシアの本には、やたらテンが出てくる。ロシア語でソーボリという。クロテン（黒貂）である。クロテンといえば『毛』である。世界で一番の『毛』の持ち主だ。『毛のない生活』を送った私は、『毛』に敏感に反応していた。

ロシアとクロテンとは、切っても切れない仲だった。ロシアの歴史はクロテンが追われた歴史だった。クロテンの毛皮はヨーロッパで高値で売れて、テンは『走るダイヤモンド』『やわらかい金』とよばれた。

ヨーロッパのお金持ちがこぞってクロテンを着たがった。

ロシア人はシベリアの先住民に、森のクロテンをとらせた。



クロテンは逃げまわったあげく、さんざんな目に遭った。

人びとがクロテンを追いまわしたので、シベリアは開発され、ロシアは今の大きな国土を保有することになった。ようするに、ヨーロッパ側にいたロシア人がテンを求めて東へ東へどんどん進んでいったらベーリング海に出てしまった、というのがひとことというシベリア開拓史なのである。テンは東で捕獲され、そこを戻るようにして西へ(ヨーロッパのお客さまへ)と運ばれた。その道はシルクロードならぬファーロードだった。」(本書 29～30 頁)

「私は病気になって考えた『人間と動物(を含む地球ぜんぶ)との関係』に対して、“ある答え”に近づきたい。毎日、そう思って生きている。

それを探しに行くことにした。私の名前のルーツである、ロシアへ。こうして私の『ファーロードへの旅』が始まった。」(同 32 頁)

ロシアとシベリア、ファーロードをたどる

ここから山口ミルコさんが「ファーロード」をたどるためにとった方法はなかなかのものだ。さすがは練達の編集者として鳴らした人だけに、その探索能力たるや、尋常ではない。まずは真冬のハバロフスクを旅して下見をし、クロテンとシベリア史の書物を渉猟し、狩猟文化研究者を訪ね歩いてインタビューし、ついに行先をロシア極東アムール州の先住民・ウデへの村と決めた。水先案内人は、この地で森林保護活動を行いつつ、木材生産や観光業で村の経済支援に取り組んでいる日本の NPO「タイガフォーラム」(前身は「地球の友」(FoE Japan)の野口氏。その詳しい経過は本書に譲るとして、山口さんのウデへの村訪問記を少しだけのぞいてみよう。

先住民・ウデへの村「クラスニヤール村」は、ハバロフスクから南へ車で 7 時間、針葉樹と広葉樹が混生する原生林(ウスリースクタイガ)の中にある。アムール川の支流ウスリー川の、そのまた支流ビキン川が村のそばをゆったりと流れる。「村の人口約 700 人。絶滅危惧種をふくむ多種多様な生き物とともに自然の恵みを巧みに利用して生きてきた先住民・ウデへを主に、ナナイやウリチといったツングース系民族やロシア系の人々が住む多民族村だ。」(同 122 頁)

優しいのに笑わないウデへ人の家庭にホームステイし、バーニャ(ロシア式サウナ)で汗を流し、夜中に懐中電灯を持って星空の下を野外のトイレに出かける生活を体験する著者は、飛び交う虫や、その辺を歩いている犬たちとも、話ができるような気分になる。そしてウデへのベテラン漁師アレクセイとのタイガでのデート。著者は、ビキンの川辺にそそり立つ小高い山に、けもの道をかきわけて登り、クロテンを探す。結局、クロテンに会うことはできなかったが、ウデへの森での生活が、著者に新しい力を与えてくれたようだ。それらが、軽妙な筆致で生き生きと描かれる。

読者は、山口さんのクロテン探しの旅と一緒にたどる道すがら、シベリア開拓とクロテンの受難史や、シベリアに抑留された日本兵捕虜の話、「サンタン交易」でつながった日本と北東アジアの関係、豊かな森林資源がオホーツク海の「うおつきりん」となっていること、にもかかわらず開発によってタイガと永久凍土の破壊が進んでいることなど、シベリアとロシアのさまざまな顔を知ることになるだろう。

生きることは殺すことと同義

筆致は軽妙だが、人もまた自然の一部として、「殺しながら生きている」のだという著者の言葉は結構重い。生きることは殺すことと同義なのだ。

「クラスニヤール村では、いまでもクロテン業が「仕事」として生きていた。クロテンをとる人、毛皮を売る人、毛皮を使って靴や民芸品を作る人、に会い、クロテンにまつわるさまざまなものを、見る事ができた。クロテンをとる罟、皮をなめす道具、毛皮を剥がされて乾いた死骸、内臓を抜きとられ皮の表裏をひっくりかえされたクロテンの姿 — 見るとじつに痛々しく、背筋がぞくぞくとする。

私はガン治療のために肉食をやめたのだが、それ以降は、動物が人間の贅沢や過食の犠牲になることに心から胸を痛めてきた。しかしいろんなことを見たり聞いたりしているうちに、ただ「動物がかわいそう」ではなんの役にも立たないと思うようになった。そしてクロテンを探しに出かけたことで、「人が自然のなかに入る」ことも、学びはじめた。

クロテンだって季節が来れば落ちる実ばかりを食べているわけではない。逃げる動物を追いかけて、つかみとって、食らう。木が育ち、実が成り、その実を食べにアカシカが集まり、アカシカを食べにトラがやってくる。リスが集まり、リスを食べにクロテンが集まる。クロテンを求めて人間もやってくる。そして人間はクロテンをちよっととる。そのようにしてみんな生きる。人間も森の一部になることが自然なのだ。この地球で私たちも生きていくならば。」(同 137-183 頁)

* * *

山口ミルコさんのがん闘病と復活の歩みは、本書の前に出版された「毛のない生活」(ミシマ社)に詳しい。本書はその続編でもある。どちらも深刻な問題を扱いながら、さりりと心に沁みる『復活の書』となっている。そして、2 冊の本は「何度でも復活しよう、そうしよう。」という印象的なフレーズで締めくくられる。そこに著者・山口ミルコさんの静かな闘志がこめられているようだ。

なお、ウデへの村で森林保護に取り組む NPO「FoE」(現タイガフォーラム)の活動については、以前、本紙 115 号(2002 年 10 月)で紹介したことがある。十数年を経て、今もなお NPO の活動が続けられていることを本書で知り、とても嬉しくなった。敬意とともに付記しておきます。

(2015 年 3 月／伏田昌義)



【ロシア生活 不思議体験】 (第 2 話)

『電話』

白井 秀治 (JIC 東京)



20 年前、僕はロシアに留学していた。

同じ学部で同じ学科の友人が学生結婚した。賢いジーマと、なかなか美人のイーラ。お似合いだった。

彼の両親が持っていたクバルチーラ (アパート) を城として新しい生活が始まる。何とも羨ましい。

「落ち着いたら、小さいけどパーティーをやるんだ。お前も招待するから必ず来いな」 ジーマは僕に新居のメモを手渡し、慌ただしく走り去った。

メモには日時と電話番号のみで住所は記入されていなかった。

「まあ、後で訊けばいいか」 ノートの切れ端に書かれたメモを見ながら僕は言った。

ジーマの住所を訊くのをすっかり忘れていたパーティー前日の金曜日。

机の隅に置いておいた彼のメモを取り電話した。

「もしもし？」 電話口に出たのは声から察するに年配の女性だった。きっと彼女のお母様だろうと思った。

「ジーマの友達で、日本人のヒデと申します。彼とお話できますか？」 なるだけ丁寧に言った。

「本当にジーマのお友達ですか？」 一呼吸おいて電話口のマダムは静かに言った。

「はい。同じ大学の同じ学部です」

「そうなのね。残念だけど、今ジーマは夢の中なの」

「…そうなんですね。では、イーラに替わって頂けますか？」 ちょっと考えてから、気を取り直して僕は続けた。

「あらあら。イーラはまだ帰ってないのよ」 相変わらずマダムはやさしい口調で言った。

「そうですか…。それなら、日本人のヒデから電話があったことをお伝えください」

「でもね、貴方は知らないかもしれないけど、イーラは 5 歳でジーマはまだ 2 歳なのよ。私が知る限りで彼らに日本

人のお友達はいないと思うんだけど。。。」 外国人の僕にゆっくりと分かりやすいロシア語でマダムは言った。

「……」

「ちょっと驚いたかしら？ 貴方のこと、本当に良く解るわ」

「……」

「彼らが大きくなったら友達になってね」

「はい。必ず友達になります。ありがとうございます。失礼しました」僕は正直な気持ちで言った。

「そうね。あなたにもありがとうって言うわ。さようなら。頑張ってね」

僕は受話器を数秒間眺めてから、丁寧に置いた。

数分が経った。

もう一度、電話番号を確かめながら電話した。

「もしもし？」 さっきのマダムだった。

僕は間髪入れずに受話器を置いた。

番号は間違えていないと確信したが、頭クエスチョンマークが僕の論理思考形式を覆い隠した。それ以来、何かがひっきり僕は一人で悩んだ。

数日後、大学でジーマとイーラに会った。

「どうして来なかった？すっごく楽しかったのに！」

「ごめん。ちょっと急な用事ができて…」

「イーラの友達で日本最頂の美人さんが来てたんだけ！」

「本当？残念だったなあ…」

「その娘もイーラだけだね」

「……」僕はしばらく遠くを見て深呼吸をした。

「どうした？」

「いや。なんでもない」

きっと世界中には同じ名前の人が星の数ほどいるんだろう…。再び頭の中に靄がかかった。

あれから 20 年以上経つ。

友達だったジーマとイーラとは連絡もとっていないが、小さかったジーマとイーラはどうしているだろう。時々思い出す。

ロシア文化フェスティバル 2015 IN JAPAN

* 今年も多彩なプログラムが予定されています。

ヴァレリー・ポリャンスキー指揮

ロシア国立交響楽団コンサート

- 7 月 17 日 新潟・リゅーとぴあ新潟市民文化会館
- 7 月 18 日 東京・東京芸術劇場
- 7 月 19 日 愛知・愛知県立芸術劇場
- 7 月 20 日 大阪・大阪シンフォニーホール
- 7 月 24 日 福岡・アクロス福岡
- 7 月 25 日 広島・三原市民芸術センター・ポポロ
- 7 月 26 日 宮城・東北大学萩ホール
- 7 月 28 日 岩手・盛岡市民文化ホール

問合せ先: テンポプリモ

<http://tempoprino.co.jp/contents/ticket/russia.html>

ポリショイサーカス公演

- 7 月 18 日～26 日 東京・東京体育館
- 7 月 29 日～8 月 5 日 神奈川・横浜文化体育館
- 8 月 8 日～11 日 千葉・幕張メッセ・イベントホール
- 8 月 14 日～17 日 福岡・福岡国際センター
- 8 月 21 日～24 日 大阪・ボディメーカーコロシウム
- 8 月 27 日～31 日 愛知・愛知県体育館

問合せ: ポリショイサーカス <http://www.bolshoicircus.com/>

レニングラード国立舞台サーカス公演

- 7 月 24 日 飯能市民会館
- 7 月 25 日 志木市市民会館
- 7 月 26 日 町田市市民ホール
- 7 月 27 日 富士宮市民文化会館
- 7 月 29 日 長野・駒ヶ根市民文化会館
- 7 月 30 日 長野・茅野市民館
- 7 月 31 日 岐阜・羽島市文化センター
- 8 月 1 日 京都府中丹文化会館
- 8 月 2 日 滋賀・野洲文化ホール
- 8 月 4 日 奈良・かしはら万葉ホール
- 8 月 6 日 加古川市民会館
- 8 月 7 日 東郷町民会館
- 8 月 8 日 バロー文化ホール(多治見市文化会館)
- 8 月 9 日 文化パルク城陽
- 8 月 10 日 和歌山県民文化会館
- 8 月 12 日 鹿屋市文化会館

問合せ先: 光藍社 <http://www.koransha.com/>

ロシアン・ピアノスクール in 東京 2015

セルゲイ・ドレンスキー教授音楽監督他

8 月 8 日(土)～8 月 15 日(土)全 16 回 東京

問合せ: カワイ音楽振興会 03-5485-8511



サハリン人形劇団公演(9 月)

9 月 北海道各都市

問合せ先: (有)劇団風の子北海道 011-726-3619

モスクワ・カルテット コンサート

10 月 30 日(金) 東京

10 月 31 日(土) マスタークラス

11 月 2 日(月) 東京・紀尾井ホール

11 月 6 日(金) 静岡音楽館 AOI

ゴレンシュテイン指揮 東京交響楽団 S・カスプロフ(ピアノ)

12 月 12 日(土) ミューザ川崎シンフォニーホール

12 月 13 日(日) サントリーホール

ムソルグスキー/R・コルサコフ: 交響詩「禿山の一夜」

ラフマニノフ: パガニーニの主題による狂詩曲作品 43 他

問合せ: 東京交響楽団チケットセンター 044-520-1511

その他

サンクト・ペテルブルグ・バレエシアター

9 月(予定) 白鳥の湖 眠れる森の美女

問合せ: 光藍社 <http://www.koransha.com/>

国立モスクワアカデミー合唱団 コンサート

11 月中旬～12 月初旬

問合せ: アルス東京 <http://www.arstokyo.co.jp/>

クリスマス/アヴェ・マリア(ペテルブルグ室内合奏団)

12 月 東京オペラシティ大ホール他

問合せ: 光藍社 <http://www.koransha.com/>

クロージング・コンサート～国立サンクトペテルブルグアカデミーバレエ 公演(ヤコブソン)

12 月 19 日(土) 東京国際フォーラム

→ 詳細は、文化フェスティバル日本組織委員会にお問合わせください(☎ 03-5919-1051)

◆◆編集後記◆◆

▼今号は、「ロシアの世界文化遺産」特集第 2 弾として、「黄金の環」の古都の魅力を取り上げました。調べてみて、「こんなに文化豊かな国だったのか」と認識を新たにしました。ロシアの奥深さは底なしです▼本号で紹介した 2 冊の本は、文句なくお勧めです。「戦火のシンフォニー」の跡をたどる旅、シベリアで受難の黒テンを探すファールロードの旅、企画してみませんか? ▼夏のシーズンをひかえ、旅行センターは、嬉しいけれど、やや辛い忙しさになってきました。忙しい時こそ平常心で、「やれることを、しっかりやりきる」構えを失わず、一つづつ片付けていきたいものです。皆さん、頑張りましょう! (F)